

はじめに

本論集『生存と共生——人文学の現在 (2)』は、美術、音楽、文学、教育学など、人文学の様々な分野の研究を通じて、人文学の現在と役割を示そうとするささやかな試みである。

最初に各論文の内容を紹介すると、タマーラ・ガレーエワによる「ロシアの地方都市における社会主義後期、ペレストロイカ期におけるもう一つの芸術（オルタナティブ・アート）の実践——スヴェルドロフスク／エカチェリンブルクの事例」は、ロシア第4の都市であるスヴェルドロフスク（現エカチェリンブルク）の1960年代から90年代までの非公式芸術を俯瞰した論考である。ウラル山脈の麓に位置するスヴェルドロフスクは、ヨーロッパとアジアの分岐点とされ、ソ連時代は重工業の重要拠点として閉鎖都市に指定されていた。こうした地理的・歴史的条件、および視覚的条件（工業地区の粗野な光景）によって、1960年代ソ連非公式美術の特徴の一つである「荒削りのスタイル」が、スヴェルドロフスクでは他の都市より長く存続したとガレーエワは指摘し、同都市の現代美術に影響を与えた作家B.U. カシキン（ブカシキン）の作品を詳しく分析している。また、1960年代から70年代にかけて活動した〈ウクトゥス・グループ〉の主要メンバーであるアンナ・タルシス（ルィ＝ニコノワ）、セルゲイ・シゲイらの初期の活動や、グループが発行した雑誌、他の芸術グループについても詳述している。

1980年代末、ソ連の文化界に自由化の波が訪れると、スヴェルドロフスクでも、発禁だった文学作品の出版が進み、ロックバンドのコンサート（スヴェルドロフスクは〈ノーチラス・ポンピリウス〉や〈チャイフ〉など著名なロックバンドを輩出している）や、ソ連の公式芸術の路線から外れた様々な芸術団体の展覧会が盛んに開催されるようになる。とりわけ、芸術家グループ〈スリコフ 31〉（グループ名は、彼らが展覧会を開催した文化会館の住所スリコフ通り 31番地にちなんでいる）の展覧会は話題を呼び、ソ連の社会的、政治的な変化が人々の生活に及ぼす影響を主題としたイーゴリ・シューロフの作品などが、人々に衝撃を与えた。

〈スリコフ 31〉の展覧会では、油彩、ドローイング、彫刻などに加えて、インスタレーション、コラージュも展示され、ウラジーミル・ジューコフは連作オブジェを出展した。〈スリコフ 31〉は1988年には、より公的な場である市立美術館で展覧会を開催しているが、その際、ニコライ・フェドレーエフが、ソツ・アートの精神であえてソ連の公式芸術の様式で制作したボリス・エリツィンの肖像画が検閲で問題となり、会場から撤去されるという事件が起こった。折しも1988年は他の政治局員達によるエリツィン批判が高まった年であり、彼を意図的に「称揚する」作品は政治的に問題があるとみなされたためである。フェドレーエフの作品はモスクワ・コンセプチュアリズムを想起させるが、より辛辣であり、彼の作品の大部分は写真が残されるのみで実物は保管されていない。

地方都市の美術の変化を知ることは、ソ連後期の美術史、ロシア現代美術の多様性を理解するために重要であるが、ロシア国内でも（モスクワの非公式芸術グループについての文献は多数あるのに対して）スヴェドドロフスクの現代芸術を網羅的に扱った研究は非常に少ない。その意味でも、スヴェドドロフスクの現代美術研究の第一人者であり、ウラル連邦大学附属ブカシキン美術館館長としてウラルの現代美術を調査し普及に努めてきたガレーエワによる本論文は、内外の研究者にとって、きわめて貴重な文献である。

高橋健一郎による「ロシア・モダニズム音楽における〈ジャポニスム〉と〈遠近法〉について——ストラヴィンスキーとルリエーの和歌歌曲を例に——」は、イーゴリ・ストラヴィンスキーの《3つの日本の抒情歌》とアルトゥール・ルリエーの《日本組曲》という2つの和歌歌曲集を取り上げ、両者におけるジャポニスムと創作原理の関係を考察することによって、ロシア・モダニズム音楽におけるジャポニスムの意味を分析した論文である。

19世紀末から20世紀初頭にかけてロシアでもジャポニスムの波が起こり、短歌、俳句、浮世絵などの日本文化が様々な形でロシア文化に影響を与えたが、本論考は、ジャポニスムが作品の根本的な創作原理の変容に関わっている事例に焦点を当て、和歌歌曲の内容と文化史における意味を綿密に考察している。

1910年代前半の西洋音楽においては、古典的な機能と声という強固な構造とその秩序に基づく旋律、拍節法、それらを論理的にまとめあげる構造の限界性が認識されるようになり、そこから脱して新たな音楽を目指す探求が試みられた。ストラヴィンスキーとルリエーも例外ではなく、《3つの日本の抒情歌》と《日本組曲》も、そうした意識のもとに作曲されている。

ストラヴィンスキーとルリエーは、ルネッサンス以来の遠近法的な空間認識に通じる近代的調性音楽（＝幾何学遠近法的音楽）の限界を越えようとした点は共通しているが、その方向性は異なっていた。

ストラヴィンスキーは伝統的な西洋音楽を「3次元的」とみなし、日本の詩歌、語調、浮世絵などの日本美術における非遠近法的な書法を和歌歌曲集において用いながら、2次元的方向性を目指そうとした。それに対してルリエーは、従来の西洋音楽を「2次元的」なものとして認識し、真の意味での3次元の音楽を目指して、音空間の拡大によって奥行を表現しようとした。また、歌詞と音楽の関係を分析すると、ルリエーが4次元の空間まで実現しようとしたことも明らかになる。

本論文は、両作曲家が、日本の音楽や美術、文学などの様々な諸要素を自分自身の中で再構成しながら独自の音楽的表現法を完成させたこと、ジャポニスムが新しい音楽を生み出す触媒になったことを、同時代のロシア・アヴァンギャルド美術との関係性も指摘しつつ、音楽的、文化史的、比較文化論的視点から明示する先駆的な研究である。

アンナ・オースキナによる『絵本花葛羅』は、1765年に山崎金兵衛を版元に出版された、鈴木春信画による『絵本花葛羅』の資料紹介であると共に、先行研究を整理し、本書の特徴を分析するものである。鈴木春信画による『三十六歌仙』のアンソロジーである『絵本花葛羅』は、和歌の出版の流行と、広い読者層を想定した平易な言葉を用いた書物の刊行という、当時の出版状況の2つの傾向を映し出している。

アンナ・コヴァレフスカヤによる「義経の御曹子島渡——日本文化における説話の話型とヴァリエーション」は、日本文化の主要な主題の一つであった源義経の「御曹子島渡」というテーマに注目し、『義経記』、および『御曹子島渡』、『天狗の内裏』などの御伽草紙、アイヌの伝説に着目し、物語の構造を分析している。

物語は、「0.導入」、「1.（幻想的な）旅」、「2. 陰陽師である鬼一法眼（かねひら大王など、別の設定もある）のもとから兵法書を盗み出す（ここでは鬼一法眼の娘との愛も描かれる）」、「3. 追跡：義経の裏切りに気づいた鬼一法眼のもとから逃走する。娘は死ぬ」の4つの部分に分けられる。コヴァレフスカヤは、

インド文学と日本文学における島々の旅というテーマの共通性に注目し、文化伝搬の可能性について指摘する一方で、義経伝説と「桃太郎」、「一寸法師」の物語の構造の類似（主人公の背丈が小さい／島々を旅する／禁じられた城に入って宝物を得る）を分析している。

義経が盗み出す兵法書の題名は、物語によって異なり、中国の有名な兵法書の名前が挙げられているケースもあるが、『御曹子島渡』では、藤原秀衡の助言により、北の国に住むかねひら大王から「大日の法」という兵法書を盗み出すという設定になっている。ここには大日如来に象徴される仏教のテーマが表れている。

なお、義経は、兵法書を盗み出すにあたって持ち主の娘に助けられるが、日本文学において援助者としての若い女性というモチーフが初めて登場したのは、『古事記』における須勢理毘売命（素戔鳴尊の娘で大国主神の妻）である。この他にもコヴァレスフカヤは、日本の物語を、フィリピン、ネパール、インドなどのアジア諸地域の物語と比較し、世界文化のコンテキストの中でタイポロジー的な分析を行っている。

ゾーヤ・エフィーモワは、カリフォルニア、サンノゼ市でロシア語スクールを創設し、ロシア語を母語とする親と共にアメリカで暮らす児童達にロシア語を教えている。エフィーモワの「継承語年少学習者と第二言語学習者——ロシア語教育の方法」は、そうしたロシア語教育の経験のもとに書かれた、実践研究である。先行研究によれば、語学習得に際して、第二言語学習者は、まず単語を学び、次に文章構成を、そして長文テキストを学習するという具合に、細部から全体へ視野を広げていく学習方法が有効だとされている。それに対して、継承語学習者は、テキスト全体から始めて、次に文章、そして単語という具合に、全体から細部へ視点を移していく学習方法が望ましいとされる。エフィーモワは、2008年から2011年まで千葉大学、東京外国語大学で約100人の大学生（ロシア語を外国語として学ぶ学習者）にロシア語を教え、2012年から2017年までカリフォルニアで約100人の継承語学習者である4歳から15歳の年少者にロシア語を教えた経験から、各々のケースにおいて効果的なロシア語教育法を考察している。

まず発音についてだが、外国語として学ぶ大人の学習者の場合は、発音練習に時間をかけ、母語と外国語の発音の違いを理解させることが重要になる。それに対して、継承語年少学習者の場合は、とりわけ5、6歳前後までの場合は発音するための器官が未発達なために、ある種の発音については特別なトレーニングを必要とすることがある。

語彙に関しては、継承語年少学習者は、家庭においてすでに一定の語彙は身につけているが、それは日常的に使用する語彙に限られており、小学校で英語を用いて学んでいる教科の内容等についてロシア語で説明することは難しい。そのため、科学に関する語彙、公的な場で使用する語彙を増やしていく必要がある。一方、外国語としてロシア語を学ぶ学習者の場合は、授業計画に沿って基礎的な語彙全般を学ぶが、ロシア留学を予定する学生などの場合は、生活や留学に必要な語彙を集中的に学ぶことになる。

本論文は、この他にも、文法、リーディング、リスニング、ライティングについても、両タイプの学習者が留意すべき点、各々のケースで効果的な学習方法を明確に提示し、継承語年少学習者にロシア語を教える際には、実は、外国語としてロシア語を学ぶ成人の学習者のための教育法も部分的に取り入れることが重要であると指摘している。

以下の2本の論考は、日本語で書かれているため簡単な紹介にとどめるが、浜崎慎吾の「戦後日本

における「ロシア民謡」の受容と変容——ショスタコーヴィチ『森の歌』はどのように受容されたか」は、ショスタコーヴィチの「森の歌」が日本で受容、訳出されるにあたって、オリジナルの歌詞がどのように変容しているか（スターリン、ソ連、社会主義等の表現の削除等）を分析した論考である。巻末には、原詩の直訳と、日本で演奏されている歌詞を比較した貴重な資料が付されている。

鴻野わか菜の「アレクサンドル・ポノマリョフの詩『陽光降りそそぐ極圏の終わらない昼』と南極ビエンナーレ」は、ロシアの現代美術家アレクサンドル・ポノマリョフがコミッショナーを務める第1回南極ビエンナーレのマニフェストである詩を全訳し、その主題や背景を読み解いた、資料的な性格を持つ論考である。

本論集に収められた7本の論考の分野は、教育学、芸術学、音楽、文化、文学など多岐に渡っているが、広い意味で文化接触（比較文学、異文化の受容、都市における現代美術作家や流派の相互関係、国際芸術祭、バイリンガル教育等）に関わっている点で共通性がある。人文学の多くの分野がこのように文化接触、文化や言語の相互関係をテーマとしていることは、今後展開される国際関係や国際交流においても人文学の視点や方法論が重要な役割を果たしうることを示している。

* * *

本論集の外国人執筆者のうち3名は、千葉大学とロシアの大学の交流協定に基づく交換留学生、千葉大学外国人研究者等として、千葉大学に滞在した研究者である。ゾーヤ・エフィーモワ氏の論考には、千葉大学外国人研究者として千葉大学に3年半に渡って在籍した時の研究、教育の経験が反映されている。日本文学研究者であるアンナ・オースキナ氏は、ロシア人文大学在学中に、派遣留学生として千葉大学で1年間学び、ロシア人文大卒業後は、同じくモスクワの教育機関である高等経済学院に講師として着任し、日本文学研究・教育に携わると同時に、現在では、高等経済学院と千葉大学の学術教育交流にも尽力している。

2016年度、千葉大学文学部では、ロシアから招聘した3名の研究者、作家による公開レクチャー、セミナーが開催された。そのうちの1名は、本論集の執筆者であるタマーラ・ガレーエワ博士（ウラル連邦大学）であり、2017年1月に、千葉大学国際交流公募事業の助成を受けて来日し、公開レクチャー「ロシア、エカチェリンプルクの現代美術——伝統からストリート・アートまで」、「20世紀初頭ロシア美術における音楽という主題とイメージ」という2つの講演を行っている。前者は、日本で初めてエカチェリンプルクの現代美術が詳しく紹介された講演であり、その内容の一部は、本論集所収の論文で発表されている。また、後者のセミナーは、20世紀初頭ロシアの音楽と美術の相互関係について、音楽を主題とする美術作品、「音楽的作品」、音楽家と美術家の交流、総合芸術などの多様な観点から論じるものであり、比較文化的視点で20世紀ロシア文化を捉え直すことの重要性を示唆した。

一方、2016年11月には、ロシア人文大学から日本文学・日本文化研究者であるアレクサンドル・メシエリャコフ教授が来日し、千葉大学文学部公開レクチャー「日本文化における海という空間」を行った。メシエリャコフ教授は中世から昭和にかけての日本文学、思想、教科書、唱歌等における海という空間の表象について語り、日本文化における海のイメージが、海の向こう側にある国々との対外関係やイデ

オロギーによってたえず変化してきたことを指摘し、「不変の日本文化、あるいは変わらないロシア文化というものは存在しない。文化はつねに変わっていく」と結論づけた。

同年 12 月には、ソ連時代に非公式芸術家として活躍し、現在も各国のアーティストインレジデンスで制作を続けるアーティスト、ニキータ・アレクセエフ氏が千葉大学を訪問し、文学部公開セミナー「ニキータ・アレクセエフ、作品と日本について語る」において、1960-70 年代ソ連におけるジャポニスムの波と、自身の作品への日本文化の影響を語った。アレクセエフ氏はソ連期に日本文化に傾倒し、自伝的著書『記憶の連なり』等でも日本の古典について言及しており、代表作に、日本の伝承「箒木」を主題とする連作ドローイングがある。

なお、アレクセエフ氏は、北アルプス国際芸術祭に参加するため、2017 年 5 月に来日して長野県大町市で制作を行い、6 月上旬には再度、千葉大学を訪問し、講演会と学内での展覧会を行う予定である。

また、2017 年 4 月には、ガレーエワ氏と筆者を引き合わせてくれたエカチェリンプルク近郊出身の現代アーティスト、レオニート・チシコフ氏も、千葉県市原市で開催される芸術祭〈いちほらアート x ミックス〉で月のインスタレーションを展示し、同月、千葉大学文学部で公開レクチャーを行うことになっている。

チシコフは、彼の初の絵本である『なぜをひいたおつきさま』（徳間書店、拙訳）の中で、荒野の一軒家で暮らす孤独な少年が、風邪をひいて野原に落ちてきた月を看病し、月と友情を結ぶ物語を描いている。月が空に帰った後も、少年は空を見上げ、月の姿を見つけて幸せを感じ、いつか宇宙ロケットで月にいきたいと願う。大切な友人を得た少年の目には、空や周囲の風景が今までとは違ったものに見える。もし、ある場所に、「友人」（それは心を惹かれた 1 枚の絵や 1 編の詩であるかもしれない）がいれば、今まで無関心だった場所、無味乾燥に思っていた光景、地図上の一つの点にすぎないと思われていた場所も、あたたかく身近なものに感じられる——。それは、たとえば日本とエカチェリンプルク、ロシア、そして国境を越えた様々な交流にもあてはまるのではないか。

* * *

この論集が刷り上がる頃、編者は南極の海上にいるはずである。第 1 回南極ビエンナーレに参加するために、世界最南端の町ウシュアエアを 3 月 17 日に出航し、ドレイク海峡を越えて、ちょうど南極圏に達する頃、論集が刊行されるのではないかと思う。

南極ビエンナーレは、本論集でも詳しく述べているが、ロシアの現代美術作家アレクサンドル・ポノマリョフが 10 年に渡って実現に向けて邁進してきた、人類共通の未来を考えることを目的とする国際芸術祭である。

南極ビエンナーレと聞いて、最初は誰もが途方もない夢だと思った。私も最初は半信半疑だったし、ましてや自分が参加するとは夢にも思っていなかったので、思いがけず招待された時には、自分がどんな役割を果たせるのか逡巡した。

そんな折、池澤夏樹氏の講演会で、世界のあらゆる場所を自分の目で見るという作家の生き方に触発され、それをきっかけに池澤氏の小説『氷山の南』を読み、次のような一節を見つけた。冰山を見たいと思って南極行きの船に密航者として乗り込んだ主人公、アイヌの青年の言葉である——「もしも船に残れたら、ぼくはすべてを見ます。意味づけはせず、解釈はせず、ただただ記憶します」。そして青年は、

何 10 年もたってからこのプロジェクトが評価される時のための記録を作ると語る。

私も青年にならって、微力ながら「偏見なき目撃と報告」ができるように努めたいと思うが、それと同時に、私のような平凡な者が乗船することに少しでも意味があるとすれば、それは、世界初の南極ビエンナーレの船が、「選ばれた人々」の船から「普通の人々の船」、「皆の船」に変わることはないかと感じている。

ポノマリョフ氏はかつて、第 2 次チェチェン戦争下のモスクワで、アジアからの一留学生にすぎない私に、展覧会で会う度に暖かく手を差し伸べては、作品について熱心に解説し、画集を贈ってくれた。だからいつも今度こそは恩返ししたいと思い、仕事を手伝おうとするのだが、気がつけばまた、自分が与えるより何 10 倍も大きい感動や貴重な体験を相手に贈られている。ロシアの作家や研究者との付き合いは、しばしばそうになってしまう。

ポノマリョフ氏は 18 年間の交友を通じて、そして今回は南極ビエンナーレを通じて、夢見て強く願い続ければかなうということ、人と人の繋がり大切さを教えてくれた。彼は、親友が入院すれば超多忙なスケジュールの合間を縫ってパリに見舞いに行き、別の親友が個展を開くとなれば「世界の涯」まで飛んで行き、瀬戸内国際芸術祭では地元の人々と心を通わせるために早起きして小型漁船に乗せてもらい、共に漁をしていた。私がポノマリョフ夫妻に瀬戸内の日本酒を数本送った時には、亡祖父が好んだ広島日本酒だけは再会の日まで開封せずにとっておいて、祖父のために献杯してくれた…… そうした彼の人間的な心遣い、一つ一つの地道な行動や交流、共感の積み重ねが、多くの人の協力を必要とする南極ビエンナーレという壮大なプロジェクトの実現を可能にしたのだと思う。

* * *

エカチェリブルク、モスクワ、サンノゼ、そして札幌、千葉在住の執筆者の方々が素晴らしい論文を寄せて下さった本論集もまた、世界に交流の輪を広げていくためのささやかな場になれば幸いです。

なお、本論集の編集、研究に対して平成 28 年度ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ（連携型）「千葉大学研究支援要員配置制度」の助成を、ガレーエワ氏招聘に対して平成 28 年度千葉大学国際交流事業「海外との組織的教育研究交流支援プログラム」の助成を受けました。記して感謝申し上げます。

執筆者、和田オリガ氏をはじめとする編集協力者の方々、手に取って下さった皆様の幸福を船上から願いつつ。

来る 2017 年 3 月 17 日に。

鴻野わか菜